
MOON-4 夜叉 4 <29>

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MOON - 4 夜叉 4 <29>

【Zコード】

Z3313Z

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

記憶を取り戻した秀は榊から桜の正体を明かされる。また裕希も夜叉から九桜と和人との『繋がり』を知らされる・・・

夜叉4 第1章完結と第2章のスタートです。

1・月夜(がつや) - 4 2・月夜(がつや) - 1(前書き)

同時公開です。お気輕にどうぞ。

1・月夜(がつや) - 4 2・月夜(がつや) - 1

1・月夜 がつや - 4

深夜。満月間近の夜。

桜はあれから眠つたままだつた。

2階のバルコニーに彼らの姿があつた。

「昼間のは本当に『桜』なのか?」

秀は傍らに立つ榦に言つた。榦はややあつて、

「桜はあの夜、お前を待つていたんだ。」

「あの夜?」

「お前が帝王と出会つた夜。」

「え・・・・・」

秀は目を細めた。「どう言つ事。俺と和人と桜とどうこう関係があるんだ。」

「『記憶』を取り戻した様だな、秀。」

榦は視線を月から秀へと移した。「お嬢がかけた術をお嬢の中の『誰か』が解こう

としたんだ。それで、二つの意識が混乱してお嬢は血エナジーが切れたんだ。

「

「・・・・・」

「お嬢は桜の精さ。厳密に言えば、何者かによつてあの桜の樹木に封印された『闇』の者。そしてその『封印』を解いてくれる強い血エナジーを持つた者を待つていたんだ、ずっと。」

「それが……俺つて事?」

自分を指差す秀。「俺は単なる狼男ワルフ・ガイだぜ、お前と同じ。永久の強い血エナジーは持つていない。」

「それでも」

榦は呟く様に言つた。「お嬢が選んだんだ、お前を。だけど、お

前は気付かず、帝王を選んだ。

「偶然だつてば。んな事俺知らないし。

秀の困惑の表情に、榊は笑みを浮かべた。

「そんなお前だから、お嬢は『永久』^{ヒカル}の相手にお前を選んだんだ。

— 1 —

秀は榊の瞳をじつと見つめていた。

せやあこて

前編

「俺もお前と同じ位の血を

「う前も別つ一いふ通り、うまい口放する事が出来た。だけど」

そこで、彼は一呼吸置き、お前も判つてしる通り、お嬢の中に
はもう一人『誰か』がいる。それが衝突した時、桜はとてつもない
エナジーを放つ。昼間、お前を殺そうとした時のように。」

「一九三八、九月」

「深い事情までは判らない。俺は狼男の末裔だが、桜から吸血鬼に匹敵する『血』^{エナジー}をもらつた。だから - - - 『ただ者』じゃないの

104

七

秀は語り力は専門家で、木の内に力木を見力

「の闇色の瞳は確かに九桜だ。」

禮記卷之六

秀は天空を見上げた。

「だけど」

秀はぽつり、と言つた。
「和人は・・・・・もういない。」

あの紅の満月の夜 - - - 薄れる意識の中で、香木を胸に刺され倒
れていく和人の姿だけが、脳裏に焼き付いていた。

（守れなかつた・・・・・・・）

下唇を噛み締める秀。

夜風は、そんな2人を優しく包みこんでいた。

2・月夜 ぱつや -1

その夜、朝子の家で。

裕希はなかなか寝付けない。

（あの九桜つて人を和人は倒せなかつた。）

寝返りを打つ。窓からは満月間近の月光が差し込んでくる。

（どうしてだろう。あの時の和人の気持ち・・・・・・・俺が和人や秀さん、朝子さんを失つた時と同じ気持ちだつた。）

自分の中の和人の『記憶』を思い起こす。

タイセツナヒト

（和人にとって九桜が？）

裕希はベッドの上で身を起こし、

（だつたら何故、和人は九桜と鬪つたんだろう・・・いや、鬪わなければいけなかつたんだろう。）

右手の親指をきつく噛み、

（『帝王』つて本当は何だらう。唯一無一の存在で闇を統べるつて和人は言つてたけど、それが『眞実』なのかな。）

ふいに、裕希は思い立つたようにベッドから飛び降りた。

「夜叉に聞いてみよう！」

小声でそう言つとパジャマのまま深夜の寝室を後にした。

夜叉は夜の芝生の上に一人立ち、空を見上げていた。

その長い黒髪が風に大きく揺れる。

彼女の姿を見つけ、

「夜叉！」

裕希は小走りに彼女に近づいた。

卷之三

「え？」
振り返る百合
よじかのり、一もん寝たのではなか
かのた

「違うんだ。」

裕希は夜叉を見上げた。
一和人にとって九桜は大切な人だつたん

「本当に？」

卷之三

教へて、
と云ふから和ノと力相の關係が元に戻る。」

説小治政の歴史

「阿が呂ひてあニドシ好、夜叉。

用が - - - 雲に憑る。

「裕希」

夜叉は重い口を開いた。「若と九桜とは血が繋がっているのだよ。

L

「え・・・・・・・・」

「若の父上と九桜の父上とは兄弟なんじや。」

今度は裕希が沈黙する番だ。たゞ

喉の奥から引もけに出す様な声で

御只【】とへにて

支那の歴史

夜叉は頷いた。「若の父上は帝王で、それに従うべきは九桜の父上……つまり弟なのだよ。しかし、若の父上は人間の女性を愛し、九桜の父上は生糸の『闇』の者を妻とした。」

「若の母上はその『闇の血』の『重さ』に耐えきれず若を生むと
すぐに他界された。一方、九桜の方は生粋の『闇』の血を受け継い

で『帝王』としての権利保持者となつたのじゃ。」「それで」

裕希は夜叉の顔を覗き込み、「2人の帝王が存在してしまつたの。唯一無二の座の。」

「そうじゃ。」

「そんなの」

裕希は言葉に詰まつた。「ひどすぎるよ。それでも闘わなければならぬいなんて。」

「『運命』^{さだめ}だよ、裕希。」

月から雲が去つていき、夜叉の姿を明るく照らした。「やがて、九桜が復活すればまた新たな闘いが起ころ。」

「俺、どうしたらいい?」

裕希は夜叉の袂を強く掴んだ。「どうしたら和人と九桜を闘わないですむことができる?九桜の『復活』を止める事ができる?」

「それは」

夜叉は溜息をついた。「それが判れば、若も苦しみはしないであろう。」

「和人が・・・・・」

裕希は俯いた。それから、勢い良く顔を上げ、「俺、和人に聞いてみる!どうしたら闘わいで済むか。そして、例え九桜が眠つても新宿^{けっかく}で九桜の側を『狩らないで』済むか!」

「裕希。」

夜叉は目を見開いた。「そのようなこと、出来る訳ないではないか。」

「できるよ、きっといい方法があるはずだ。」

そう言い残すと裕希は家に向かつて走つて行つた。

(そう。『運命』は変えられるはず……それが、例え闘でも。)

1・月夜(がつや) - 4 2・月夜(がつや) - 1 (後書き)

"J感想をお待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3313n/>

MOON-4 夜叉 4 <29>

2010年10月11日04時00分発行